



花乃葉

乾

特	別
^5	
6590	
8	



^5
6590
8

臆葦師五十回
森々師卅七回
徐風師三周諱

播石坐隱樓

寸松菴
鵲巢
全編

三師遺詠

草葺什物

閑居

雪おそく——つわのほや松のしそ

再和坊

閑古き。あやあ月の山斜るこ

森菴

里きくふりぬ二月の雪れど

伴風葺

ち——つり

た乃道途被津渡香山もなつ部——後
直の文字すまのり流の行な——とてんか
あき葺お門！入ま薩の二字あむむ出り
ひるひと隙の曰任地まよと見えとあひ桃花
軽むと伯お父——青魚坊と叔のまよ
帰程美をいふ海地白粉化物お不ゆれん
をい従見丹もまよ——とてよとあつり——



尊皇の徳もあまの常の徳にあらむ
たまたまの徳の一曲の老の徳の供養
さうけいんもさうけいん

下保甲子蒲生

凡例

〇一の清辰後の追慕の心さうけいん
と猶も一とさうけいん自れ子孫貞なる
すかあねの口さうけいんを解かす
て僅一人一語を捧げしるる

〇今也

聖恩あまの洋の海舟を乾き
馬の蹄をさうけいんして往還の使
自由さうけいんしてさうけいん
さうけいん徳の徳さうけいん
さうけいん徳の徳さうけいん
さうけいん徳の徳さうけいん
さうけいん徳の徳さうけいん

むす持に母のすくは 是言心 義山
 すくく牛お吸り清きりぬ 李女
 むすまのふもみりやまの目 子鳳
 約曾や何新くさくくわぬ雲 道存
 をくくく夕くわはくや系乃雪 免隆
 何くくくくくく杉り小松系 一楓
 かたのくくくくくく成くく 塘字
 雨風おたりも本男乃くく様 一佳
川於

油雪れおひおひおひおひ 一佳
 たろくの日ま暈めん五月日 羊基
 言くく田畑くく海りくく張わたり 梅似
 神々にさやや本ま束の輝し雨 深仙
 早くく女の泥くくめくくくくくわたり 白己
尾掛一丈
土左まき
 翁雛子れくく念くくくくくく 楓齋
 新踏くくく月くく宵向くく改まらぬ 女 いろ原
 秋のくくわきくくくく約茶亭くく 可洗

竹まきのふと菊のや菊の心
 山雲を解くと更けに露の那
 草と花に月も静くや春の夕
 流るる水も静くや秋の夜
 袖もわが星の降りし夜あり
 うらわな女お美敷も冬も秋の襟
 侘しとや思ふも夜更けのいり
 縮つ方の志も静く成る夕なり

桐雅
 九如
 可曉
 た琴
 中二
 近白
 露松
 五風

信とていふ舟の燈や秋の夕
 宿の乃星もこれなり秋の月
 夕の星の月も静くや秋の襟
 岬もわが星の降りし夜あり
 国も静くや秋の夕
 燦輝も静くや秋の夕
 黄鳥の聲も静くや秋の夕
 物も静くや秋の夕

三好
 西素
 茶二浦
 法教
 出之
 湖夕
 雨菊
 松涛

玉柄	玉乃種子ありあはるきり雪丸卷
可松	とららわくし梅約よあやふ氷り刺
茂凌	舞し松やあ子抱しうらふおきまの
伸也	是のじりりたるは縁の被るあ
梅川	此の海すあかのうら——星月を
志中	着陸れうし移く思ふる雲衣形
甘隠	流しつてきよきんかきん川いあ
佳夕	柳よああ人しあやふあ月

圓山	松お月さきんかきんあき
遠沢	はらきんかきんあきり——作おあ
吉峰	あははあああはははははははは
花徳	秋あや入はのあは海の果
佳松	陽をやしまああああああああ
欣之	春——ああああああああああ
南翠	陽をやりりりりりりりりりりり
雪嶺	二度の月あああああああああ

こえはあ
雪嶺

晴れ森見や音乃煎汁 普化
 手紙く遊きの 脈自 三ノ六ノ井 奇坊
 山や田さうり下の人毎り 一ノ六ノ井 省己
 谷水の泡もほひあふ花の 赤湯坊
 雨霖の音くさやほみり 子松
 柳の花の影ひおと月 竹友
 曉や星の影くさやほみり 洪水

雪の音くさやほみり 西ノ店 呉雪
 夕杯の音くさやほみり 三ノ六ノ井 栢里
 急火焼の葉も味く 二ノ六ノ井 江鶴
 日れ糸くさやほみり 一ノ六ノ井 李之
 松の音くさやほみり 三ノ六ノ井 墨比
 餅つぬあも柳の音くさやほみり 杜多 可眠
 口すくさやほみり 三ノ六ノ井 春翁

霜つる如きも雪のうらみか 一屯 汀柳
 猶人か焚火乃流や雪のうら 一屯 柳
 流くくそ遊むそを横手 一屯 花亭
 旁の望下りそ果やまの月 一屯 吾苗
 多無月也早下そは色れそ 一屯 松人
 松計はぬしそあのはなう 一屯 固育
 川端しそつあそ 一屯 秋の雨 一屯 穉溪
 葉のむ乃中や蹊のあ車 一屯 梅五

人妻の月しそ居まふ初涼 一屯 孤雲
 晩静れそやましけそ霞 一屯 鳥 一屯 虎
 細うらも妻の煮なそあ 一屯 日和 一屯 車 一屯 子高
 中をとりそ 一屯 燈 一屯 ん 一屯 出 一屯 たり 一屯 月 一屯 士 一屯 松 一屯 一屯 本比田
 香を初乃牛しそむ 一屯 ち 一屯 あ 一屯 け 一屯 び 一屯 雪 一屯 介 一屯 一屯 横田 一屯 土 一屯 屋 一屯 所
 自家中や軒 一屯 の 一屯 下 一屯 たり 一屯 妻 一屯 の 一屯 雪 一屯 月亭
 切了り一尺の身や 一屯 塚 一屯 始 一屯 け 一屯 ぬ 一屯 卷汎
 簪のや 一屯 本 一屯 郵 一屯 屋 一屯 あ 一屯 たり 一屯 庭 一屯 の 一屯 室 一屯 二共

~~~~~ 菊の白ふらとを月並るゆ 一外

梅の月並るけー ちと成りきり 免川

雪の雪ふり彼月お葉山子母 雪亭

きよきき抱てら乃菊ひうか 聖徳

責るみんきー 葉しるこきり 洞雅

ふー荷ら空れきくもひり 中哉

畦うめん月月の晴や陰るお養 松夕

雪のおー 葉て葉海の九月分 一笠

あくるわのあも海より月 程角

雨乃泣あはさのー 大のま 青牛

うたうまのこらて海なるを家 樂加

月霞のりあもれきー 辰小 貫三

是の程聞て葉か葉の奥可申 欽古

きよきき出で叶のまひや新月 蘭居

山の雪忍志きりす二月の那 松二

うのや貝登りせぬ夕平写 璞斎

栞の多ゆ作て須しと出さず  
 如女  
 多結也難しり窓のきよなり  
 三江  
 さし収の声は芳あり秋降  
 壺山  
 朝日こも様うの人の心不我  
 起雲  
 十二里月もさやなとさ  
 牧堂  
 園をく牛乳なり秋の夜  
 二堂  
 海をけく日おあさるる雨引  
 負山  
 びく裾膝く海を心月夜秋  
 其柳

収洞きくと五月の浦さ  
 月海  
 さよらる美園ささきなり日  
 三田  
 きりもくも来て美きや美の海  
 赤里  
 松葉方よ小窓のきなり  
 美柳  
 咲くはらさよらるるぬらり  
 三田  
 梅子のきまり  
 二  
 様うのきまり  
 二  
 美の身よるきとくさるる雪  
 魁仙

雪ききらの目よりく小まの如 越前 松軒

繁やわらわを真一伝の如 三回 素由

鞠れらぬし悉も角ある 水賣 木高

青梅のいぢみしり 村田 星海

きりぎりす 周防赤門 若山坊

灯り 井 左琴

きよの菊月よ 井 文水

酒のきき 井 吾水

揚られか 長門武門 菜山

平佐公鳥都の事 井 雨琴

會お月 井 芳州

主の 井 志二

あ 井 其登

あ 阿波武門 蓼花

あ 井 卷国

あ 井 舎松

まきの雨あつ梳きも 好ひきり 一樹承 二穎

匠のまきや 好むまき 好むまき 一之平田 把翠

二細く葉のまき 一井尻 里吉

まきのまき 一坂東三 蘭室

まきのまき 一アサ川 野馬

婦のまき 一大正 畠留

まきのまき 一廿六川 女雪

まきのまき 一廿六川 槌肥

初雪や雪止たのまぬ 秋の空 徳多志山 子澄

飛雪 菊す中し 都の便り 好 雪貞

まきのまき 一原おし 彦孤 莎室

急目や杉の梢おき 一三ハ右岸早 海路

雪れまき 一好む 小樵灯 子澄

編りまき 一好む 溜り音 磬く

夕月やゆきの年 一好む 都へ 兔鳥伍

お菊に秋夜 一好む まき 一好む ひたり 柳眉

是上のそむはつて一多の鳥 文雅  
 崇高の氷とていふあゆみ可申 子心  
 雲の面影もいほくく夕日が 律老  
 起すこれ後種ふやあつていふ 爲二  
 狗屋しつひ一とんの牡丹くふ 江戸 葛城  
 永さしはあつていふやあつていふ 巴山  
 ちち虫の飛出んをや言のいふ 其又  
 羊心の丹海やうう一なるま 二葉坊

あつていふ葉もあつていふ白和 之ノ書四 如芝  
 志く新あつていふあつていふ 右律  
 之わあつていふあつていふ 一并キ 之得  
 多あつていふあつていふ 表小京 桂下坊  
 出代やあつていふあつていふ 桂下坊 録二  
 うあつていふあつていふ 表小京 宛的  
 帆柱をあつていふあつていふ 甲斐文 栄里  
 乙了あつていふあつていふ 表小京 流不坊



多木を勝る下流 竹の山

南より北へ流る去左丸川 赤松

麓中村 石雲

秋の夕子中村 萩の宿 此君

妻乃由人中村 茶臼の心 魯偉

狐火中村 月夜 吾松

如月の夕中村 海を渡る 雨矢

まらぬ者中村 涙の流る 志等

多月中村 月夜 李雲

山重中村 牛の夢 女友

一中村 山乃と 女友

枯草中村 萩の露 萩涼

猿中村 萩の露 萩涼

と中村 萩の露 萩涼

去中村 萩の露 萩涼

本中村 萩の露 萩涼

乃くや露をきき 掬子註 兼村松 兼方坊

み畏ふ日とをふかき 雲の小麦註 凡松

昔わくの雪れきや 垣衣註 思鏡

閑しちりて 暮る様うわ 雨江

昔晴しき昔註 ぬ細屋わ 如童

風や流るるをきき 麻糸

浪々よのうらみ 新士

十六のちや小法師 遺の香 二十

編葉よ一里は 野を隔り 公忠

かきまへの首註 ぬ両 里乙

月のおちよと連て 細代註 志忠

ふよふよのまじり 鳳枝

巨魁註 のとく 芳吹

猫ハの粥註 あり 雪お 喰 稲波

舟葉註 のちのち 女 出雲

山吹註 のちのち 小板橋 茶萌

ひく歌目口くぬけりし

水戸 多摩

名書くまてきりや古志の

雨丘

うきぬらり野くま秋

退人

うねりて後子ぬきり蛇の衣

宿考

ふりぬきりおまらり巾

戲交

野花の連もどきり花一ぬ

和融

標と梅ありまゝ思ひ雨の存

六浦

他人の落し流るむま乃も

有国

り飾二人妻の扉とまきき危

季徳

流してまききりしけり

集嘉

うきうきや二月の日のまかり

其風

三月出に若も寝くや五月雨

渡舟

海の見せも笑ふことまかり松の心

吏竜

立退くれくちん改まの形

瑞斗

定規く丹皮ちりや古甲子

文好

如海の沖よきあり雲借合

志是

春のふれ緒の洗濯より 砂塵より 魯壹  
 乃びよりと沖よりえりや小まふ不二 雪白  
 夏に灯の何ちやうと 魂系 雲曉  
 雲よりおしくなく 葦一可南 雨村  
 雪の日はのりてささく家こそ 由水  
 古舞や古節のうたの男乃子 里系  
 昔人の都よりよむと 祈りて 仲笑  
 雲のやうくやうかたあ 渡はる 九如

釣糸よ流るく 浦の小まふのわ 湖山  
 棉の苗の春のむより 衣のく 珠水  
 春の原より二度よむと 父と母 小舟  
 けあより小家建てる 山斜から 山花  
 沖のふ乾くもああ 汐干の 中々  
 雲に 雲のわはゆる 梅のふ ぶ雲  
 板の家の秋の雨より 梅のふ 美画  
 糸よ居や糸のつらや 秋の風 文堂

小坊より浪者より山に家の鴉 子胤  
柳もいん箱もいれあゝ日毎う那 子唄

○

窓のきりく福むんまきりの中 眠乙  
藤雨や青葉の中へ鳥蛙 可遂

左系  
十カト

新茶亭五十四回正巻の序

うけたまへ温孫彌も佛の生 椀花園  
百人や人の世とやうに信不違 寸松庵  
ちよとてや五十年遠らぬ日の嶽 鶴巣

け志あるを伺ひなりまわこ  
相鳥美玉縁とてこゝなまむぬ三作乃  
法印のあひくこき冥福とらけまうんと  
柳の律のよ一姫の身身とみ白とあひて  
再和原の西念の用遠とて七種の黒髪  
三作のまゝも供まゝとて一巻の  
新茶亭

松島君

宛乃口まゝにさしあはせられ花

新まななぬ冥加りこき 壺吹

陸なま小きさくはし時をばて 柳花園

海ぬくまらぬおきまりなま 不由

夢あけけうすかゝ出船のこぼれまふ 可遂

烟うよみそとがらんうたね 渡舟

船の編刺のひて厚きこ 新士

晚箱お穂なご実のこみ村 変お

善父入道まぬまお松トサ 五州

弁当れ葉を焚く春音よミ 一仙

窟乃ぬくわく並み軒のつるトサ 近白

孫のやうめ雪さかた乃雨 子鳳

と虎新も七はお白舞くら妙ミ 素元

色ひなわくさる夜のはり橋 文松

松杉の本す糸とめくろ夕トサ 懐 酒素

去幸子似て似ぬ保えお月ミ 羨塔

身は夢を津よみ留大車をも、  
 其に強よりの菊の石蓋トサ 枕程  
 和らぬ姑のきよみ面しむる、  
 中恒例を猫のひはくひ、  
 新つき一樹六中代の芽をみくも、  
 霜乃若おしり寝まのまき、  
 一疋也トサ 腰巾をき、  
 宝蔵院の鏡し寺と心、  
 可洗

国くの花とあし書あめめ、  
 三幸ゆりし一席あり、  
 出て舞ていそ代女御母のまじり、  
 海よりあとりと為し、  
 鳴るむし青やよすん小お湯、  
 髪をぬるはみそ白く名高、  
 神つ方もあぬ借芸の身は居らん、  
 雪割けん大湯乃あし、  
 花徳イツモ 喜氣トサ 璞高イツモ 松涛トサ 固有トサ 中二 秋水

幸う森なるもみは流るる河の中 イッモ 松人  
 親のゆゑさぬ人があひまひ 松 柳枝  
 百なりぬものたゞは月の雪 紫 雨花  
ニラ 順廣の皇居へ麻の敷出す テハ 俵花  
ニラ 光りたるさやのまを命とり 十二ハ 鳳枝  
トサ 秘曲をゆめの子をまき トサ 糸着  
 白くくくくくくくくくくく イッモ 魯伝  
トサ 海へりききおへり トサ 雲心

心の子まよわくも イッモ 船あり、 貫三  
 身よほして 離れ イッモ 竹枝  
 菟の角にあまの傀儡とあか イハニ 守我  
 陸海へあけ イハニ 鏡一面 雲嶺  
 かく月もまよ オハリ 月 オハリ の思 白己  
 松や トサ 苦よせん トサ 竹 トサ 吹乃 トサ 供 トサ 松二  
 出 トサ たる トサ 海 トサ 子 トサ さい トサ 出 トサ 惜 トサ み トサ 芳州  
 永き トサ 月 トサ 祥 トサ の トサ 意 トサ 心 トサ 如 トサ く トサ 文好



艶ハナシ<sup>ナカト</sup>のうらう<sup>ナ</sup>光<sup>ハ</sup>穿<sup>ス</sup>て 米<sup>二</sup>二  
一歩<sup>アハ</sup>〜〜をぬ<sup>アハ</sup>掛<sup>ス</sup>〜〜の<sup>アハ</sup>枝<sup>ハ</sup>松  
<sup>三才</sup>禅<sup>ニ</sup>宗<sup>ノ</sup>ハ<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>ワ<sup>ス</sup>〜〜世<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>福<sup>アリ</sup> 魯<sup>ト</sup>壹  
懷<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>流<sup>ス</sup>カ<sup>シ</sup>馬<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>尻<sup>ハ</sup>住<sup>ル</sup>〜<sup>ニ</sup>墨<sup>池</sup>  
今<sup>ニ</sup>さ<sup>ニ</sup>に<sup>ハ</sup>ん<sup>ト</sup>〜〜入<sup>ル</sup>墨<sup>池</sup> 青<sup>ニ</sup>志<sup>ナ</sup>  
福<sup>ニ</sup>急<sup>ニ</sup>ふ<sup>ニ</sup>も<sup>一</sup>二<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>〜<sup>ニ</sup>流<sup>ル</sup>口<sup>ノ</sup> 起<sup>ル</sup>墨<sup>池</sup>  
喜<sup>ニ</sup>定<sup>ル</sup>〜<sup>ニ</sup>何<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>懸<sup>ク</sup>〜<sup>ニ</sup>虎<sup>ノ</sup>〜<sup>ニ</sup>友<sup>ナ</sup>、<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>好<sup>ム</sup>  
<sup>ニ</sup>門<sup>ノ</sup>考<sup>ノ</sup>作<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>考<sup>ル</sup>〜<sup>ニ</sup>年<sup>ノ</sup> 雨<sup>ニ</sup>五<sup>ノ</sup>  
<sup>ミト</sup>

後<sup>ニ</sup>と<sup>シ</sup>〜<sup>ニ</sup>笑<sup>フ</sup>〜<sup>ニ</sup>戸<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>子<sup>ノ</sup>宿<sup>ル</sup> 松<sup>ニ</sup>夢<sup>ヲ</sup>  
危<sup>ニ</sup>丁<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>連<sup>ル</sup>〜<sup>ニ</sup>温<sup>ル</sup>泉<sup>ノ</sup>乃<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup> 退<sup>ル</sup>尺<sup>ノ</sup>  
吹<sup>ク</sup>久<sup>シ</sup>の<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>あ<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>浅<sup>ク</sup>乃<sup>ト</sup>直<sup>ク</sup>〜<sup>ニ</sup>あり<sup>リ</sup> 飲<sup>ム</sup>古<sup>ノ</sup>  
清<sup>ク</sup>心<sup>ノ</sup>も<sup>ト</sup>女<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>濁<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>〜<sup>ニ</sup>世<sup>ノ</sup> 可<sup>ク</sup>就<sup>ク</sup>  
身<sup>ヲ</sup>返<sup>ル</sup>〜<sup>ニ</sup>切<sup>レ</sup>〜<sup>ニ</sup>れ<sup>ト</sup>暖<sup>ク</sup>塚<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>奠<sup>ル</sup>、 五<sup>ノ</sup>雲<sup>ノ</sup>  
人<sup>ノ</sup>〜<sup>ニ</sup>〜<sup>ニ</sup>や<sup>ヲ</sup>あ<sup>ニ</sup>け<sup>ニ</sup>〜<sup>ニ</sup>り<sup>シ</sup> 小<sup>ノ</sup>舟<sup>ノ</sup>  
灯<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>出<sup>ル</sup>ある<sup>ニ</sup>月<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>〜<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>明<sup>ル</sup> 風<sup>ノ</sup>岱<sup>ノ</sup>  
押<sup>ス</sup>〜<sup>ニ</sup>〜<sup>ニ</sup>お<sup>シ</sup>撲<sup>ル</sup>の<sup>レ</sup>大<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>戸 瑞<sup>ノ</sup>斗<sup>ノ</sup>  
<sup>キイ</sup>

三

虫谷齒あつきとぬけてゆーし ウリ 湖文

こころよけりあまのほろい途 ス 其凡

きくまの分那の運高きまのほ ス 文水

改え智もまのし ミト 和融

きくまのし トサ 三四

泊寧 ミト 戲文

和を ミト 多寥

位陣 ス 乍考

空 後 子潜

遠 ミ 六浦

面 ミ 充隆

と トサ 月海

の ス 甚山

ち トサ 子嘯

料 トサ 程角

也 トサ 此思

六

抄之りいもてふしおふけの修務系 里赤  
 ちう車しとあてすゝらゝも 栗喰  
 免よりあふ子の親すかゝるのねん十本 雨江  
 め束の種れ多くとあふらイセ 麻茹  
 志んくと新婦は蕙る花かひト 桐舟  
 ちま心 留世しよさふと二人系イセ 二十  
 子と巻る牛のんあふとくさイセ 佛笑  
 ちとく新しけぬ束朝の旗ト 三固

葉あふとま一文字はまイセ 雨村  
 行きまうりしゆはか出イセ 一笠  
 待りしを指投魚の官抄イセ 雪貞  
 ありしとふらるる造忠親キイ 思齋  
十ウ 後のまて葉しは木実イセ 感イセ 琴水  
 緋う大車利 糸焼乃出 山花  
 呂兵衛といふもやめ梵端の作 葉赤  
 松入しりし入イセ 公忠

編引く一筋一置一椀もなき  
きりぬる人なき道徳く候  
光満る花は焼くもれ坐の志  
ねきよ胡蝶のとき芳の  
糖字  
紙草

二十四

一甲子の強生 徳川氏をめぐりの  
進福よ徳国に歌吟を集めて平向と

やーラヤー ー 神靈を感らる 洛陽  
の煙吹不田の二子う車舞うる 篤信  
徳をいづくも志願を ー 法令を信じる  
折々金む山はまきさよれのりく 莊嚴  
とくのいさけき西方も去此不き乃  
とひよまをさるる 面影はまきこり  
とく ー 拾香礼拝 ー なる

三楽茶

魂あまのや双林の心も  
経心も島おしきも  
不由

のこりわほい身より見のこころさき  
テハ 俤花  
 みるほき イシチ 舞踏大さうか  
キイ 龍堂よ大気きえめるきこ糸  
ミノ 物よみかたを ミ 浮志に  
 主退てほくほくよれ美思の謎 トサ 由多  
 他 トサ 禅尼に トサ ぬ人ほ トサ 黄三  
 矢叫の定まてきたる月のが トサ 志山  
 き里小降了 トサ 礎乃 トサ 音 トサ 雲吹

各十句表

南堂梅舞心 トサ 此日 トサ の トサ 舞 トサ の トサ 舞  
 身と刺 トサ 也 トサ の トサ 舞 トサ の トサ 刺 トサ 舞 トサ

傳よい集のきも トサ 一 トサ も トサ 一 トサ 花 トサ の トサ 舞  
 浦生九日遷化 トサ 一 トサ も トサ 一 トサ も トサ 一 トサ 一 トサ 一  
 世とら トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一  
 位血両社 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一 トサ 一

ちりちり自由な塔は海の思ふ如く  
音はなしくやむも思ひぬ雀と鳥  
す松菴 鶺鴒

心は山の山嶺をめぐりては思ひぬ  
夢よよとて——と作のまじきとあ——と  
——とて百寸松菴の節を列して  
つとつと国持をさき——とては鳥は  
けしきをまじりてつとつと中を  
女をかくる——とては思ひぬ

まき草の如く春のる清き雪解き

調書

後の光りもやまの陽 笑はる  
夷島も離れぬ家となくも  
こころの思ひのあはれと  
こころの思ひのあはれと  
今もそのあはれと 松菴  
月影のやとてあはれと 鶺鴒  
後——あはれとなくも 汀柳

たの白表

いさゝしんきまみまきやほくへんじ

しんきまみ

雲氣子供又つりてりてりてりてり

巻の脩飾細色と云

